

未知数であった 胎児へのアプローチ

左合 治彦 先生

国立成育医療研究センター副院長／周産期・母性診療センター長



外科医から産婦人科医への道へ

祖父の代から続く産婦人科開業医の家系で、特に母は私が幼い頃から跡を継いで欲しいと強く願っていました。幼い頃は医師になることよりも数学に興味があり、将来は数学者になろうと思っていた時期もありましたが、祖父や父と同様に県立岐阜高校から東京慈恵会医科大学へ進学しました。産婦人科に限らず幅広い領域を診ることができる医師を目指し、三井記念病院の外科で臨床研修を受けることにしました。レジデントの2年間は、毎日朝6時に採血、7時半にカンファレンス、手術を数件行った後は深夜まで標本整理、その間に昼夜を問わず救急対応という生活で、2週間の夏休み期間を除けば1年のほとんどを病院で過ごしていました。シニアレジデントの2年間も相変わらず同じような状況で、5年目にチーフレジデントとして働きました。外科医として心臓外科や消化器外科などさまざまな手術に携わりました。そして、研修が終わるとその後の進路について悩みましたが、次第に人生の終りではなくはじまりに携わりたいと考えるようになり、母校の産婦人科に入局しました。

胎児を理解するために 分子生物学・遺伝学を学ぶ

産科を専門とするようになるにつれ、日常臨床のなか

で病理や生理だけでは解決することができない問題に遭遇する場面が増えていきました。その疑問を解消するために、分子生物学や遺伝学を学びたいと考えるようになり、その先には留学も見据えるようになりました。1990年から血管内皮細胞の研究を開始し、1993年から1998年まで米国に留学しました。

1993年から1年半ほど、元 国立成育医療研究センター副院長で恩師の北川道弘先生(現 山王バースセンター院長)の後任として米国・南カリフォルニア大学で細胞接着分子のメカニズムの研究に従事しました。その後、米国・カリフォルニア大学サンフランシスコ校に移り、出生前診断を学びましたが、1年ほど経った頃、故 C.J. Epstein先生の小児科遺伝学教室に転籍しました(写真1)。そこで、ノックアウトマウスの作製がうまくいかない原因検索を行っていたところ、相互転座を見出し、部分トリソミーを有したダウン症マウスの作製に成功しました¹⁾。

胎児にあらゆる角度から アプローチする

帰国前にこれまで歩んできた人生を振り返り、これから自分が何をすべきか考えていた頃に出会ったのがSaundersの論文「pregnancy in the 21st century ; back to nature with a little assistance」²⁾です。21世紀の産科領域では、臨床遺伝学と胎児医学の分野を組み合わせ